2009年8月23日　主日礼拝メッセージ

聖書箇所：サムエル記第一９章1～14節
説教題：行くべき道を教えてください

１　「彼らにひとりの王を立てよ」

あるとき、イスラエルの長老たちがサムエルの所に来て言いました。「どうか今、ほかのすべての国民のように、私たちをさばく王を立ててください。」

神は、サムエルの口を通して警告します。もし王さまを立てたなら、あなた方の息子たちは徴兵され、軍隊に送り込まれ、戦争にかり出されていく。あなたの娘たちも、銃後の戦いを余儀なくされていくのだ。軍備を整えるために、あなたがは大変な負担を強いられていく。それでも、あなたがたは王さまが欲しいと言いはるのか。神はサムエルの口を通して、厳しく警告したのですが、それでも王さまが必要だと譲らなかった。

イスラエルを治めているのは神でした。その神を捨てて、人間の王さまを立てるようにと要求する。普通ならばそんな訴えは通るはずはありません。ところが不思議なことに神はこう言われました。「彼らの言うことを聞き、彼らにひとりの王を立てよ。」

このようにしてイスラエルの最初の王さまが立てられていきます。今朝は、その王さまがどのようにして選び出されていったのかを見て参ります。

２　美しく若い男サウル

あるところにキシュと言うベニヤミン人がいました。彼にはサウルという息子がいます。サウルの姿について聖書はこんなふうに記しています。2節。「彼は美しく若い男で、イスラエル人の中で彼より美しいものはいなかった。彼は民のだれよりも、肩から上だけ高かった。」

サムエル記は今から三千年前の時代のことを扱っておりますが、人間の考えることは同じです。読んでわかるように、彼は生まれながらにしてスターになる素質を備えています。

サウルはこの後、イスラエルの王さまになります。神の計画だからそうなったという面はあるのですが、もう一つのことがある。彼はハンサムだった。これは大きな要素でした。イスラエルが夢にまで見ていた王さま。なんと姿格好がすばらしいか。多くの人たちが見ほれてしまいました。

今、衆議院選挙が行われようとしています。どの候補者に投票するか、ある人たちは政策とか経歴などを参考にし投票します。しかしある人たちは、候補者の顔立ちやら背格好で選ぶのだそうです。実にミーハーな気もしますが、三千年前のイスラエルでもたいして変わらない。少し旧約の世界が身ぢかに感じられるのではないでしょうか。

３　行くべき道を教えてくれるだろう

このとき、サウルは自分が将来イスラエルの王さまになることなどまだ知るよしもありません。ある時、父親の所有していた雌ロバがいなくなり、サウルは若者をひとり従えて捜索の旅に出かけます。しかし、見つかりません。食料もなくなってきたし、父親が心

配するだろうということで、サウルは引き返そうとします。そのとき、サウルの助手として付き従っていたひとりの若者が、こう言います。「待ってください。この町には神の人がいます。今そこへまいりましょう。たぶん、私たちの行くべき道を教えてくれるでしょう。」

神の人とはサムエルのことです。サムエルは高齢にはなっていましたが、人々に敬われ、サムエルの語ったことばはすべてそのとおりに実現していく。そのように評価は揺るぎないものとなっていました。この若者は、雌ロバの居場所をサムエルに伺えば教えてくれるに違いないと思いました。

この提案を聞いてサウルは、「でも手ぶらで行くことができない」と心配します。しかし若者は言います。「ご覧ください。私の手に四分の一シェケルの銀があります。これを神の人に差し上げましょう。」

四分の一シェケルは、今の貨幣価値で言えば数千円から 1 万円くらいに相当するでしょうか。いずれにしても、雌ロバの行方を伺うものとしては、十分な額です。

早速ふたりはサムエルが滞在している町に向かいます。しかし初めての町です。どこにそのサムエルがいるのかわかりません。ちょうど水を汲みに通りかかった娘たちに尋ねることにしました。聞くと「つい先におられる」と言う。ふたりは急いで坂道を上り、町に入りました。そうしたら向こう側からサムエルがちょうどふたりの方に向かって出てきたところだった。

このようにしてサムエルはサウルに出会います。このような経過があって、サムエルはこの後、サウルをイスラエルの最初の王として立てていくことになります。

4　すべては偶然だ！

いまざっと、雌ロバが行方不明になってから、サムエルとサウルとの出会いまでを簡単にたどってみました。信仰のない方ならば、このところをどう説明するでしょうか。おそらく、多くの方はこれはすべて偶然であったと言うでしょう。雌ロバがいなくなったはたまたまだった。若い者がサムエルに会いに行こうと言い出したのも思いつきだったのだ。「私の手に四分の一シェケルがあります」と言っているけれど、それは最初から財布に入れていただけのこと。町に行ったら、サムエルと道の真ん中でばったり会うことになった。それも偶然に過ぎない。

今の時代では、ごく普通のしばしば耳にする意見です。しかし、この考え方、よくよく考えますと実は大変大きな問題を私たちに突きつけてしまうのです。どういうことか。

すべてのことは偶然に過ぎない。ということは、この自分のいのち、自分の人生。すべてが偶然だったということになってしまいます。もっと突き詰めると、あなたがここに生きていることはたまたまだった。あなたのいのちには大した意味がない。そういうことになってしまう。でも、こんなふうに言われて、嬉しいと思う方はいるでしょう。

中にはこう反論する方もいます。「それがこの自然界の法則です。すべてが偶然だと言われても、私は何も感じません。」冷静に受けとめるというのです。

私の数少ない友人のひとりに、この通りの生き方を貫いている人がいます。彼は科学を学び、科学の世界で生きています。もちろん神の存在など認めません。常に物事を科学的に説明しようとしてきました。

ところが数年前、その友人の母親が認知症

にであることがわかりました。そのことをきっかけにして、父親とのことでも悩むことになりました。父親がいかにわがままで子どもっぽくて、そのために自分がどれだけ苦労したか、私に話してくれました。彼は最初、自分の両親のことを科学的に説明し、納得しようと努力しました。

しかしおわかりのように、そんなことができるはずはありません。物事を科学的に冷静に観察することが大切だという信念で生きてきた。けれども自分の親のことが説明できない。それで悩んでいます。とうとうこう告白してくれました。「心の中にぽっかりと穴が開いている。その穴を埋めるために何が必要なのか、自分にはわからない。」私は、一瞬言いたくなりました。「それは神しか埋めることができない。」しかし、ぐっとこらえました。まだ時期ではないと判断したからです。

私の友人のことを見ても、つくづく思います。人間は結局自分の人生について納得のできる説明を求めるものなのだ。意味を求めようとする存在なのだということです。

5　すべてに意味がある世界

（1）もしこの世界に意味があるのなら

サムエル記のこの箇所に限らず、この世界はすべては偶然だというひとことで片づけようとするなら、結局、私たちの存在そのものには大した意味がないという結論になります。それは私たちを深く失望させてしまいます。聖書は、この事実を別の表現で語っています。

「人はパンだけで生きるのではない、人は主の口から出るすべてのもので生きる。」（申命記 8:3）

すべては偶然だ片づけようとする態度は、人はパンだけあれば十分なのだという生き方とほとんど同じです。パンということばをお金ということばに置き換えても良いでしょう。いずれにしても、目に見えるものだけがこの世界のすべてという考え方です。目に見えないものは存在しない。神などと言うものはもちろん存在するはずがない。

しかし聖書は全く異なる基準を私たちに突きつけてきます。もちろん人間は、パンがなければ生きることはできない。けれども、それで十分なのではない。私たちは神の御言葉すべてによって生かされている者だ、あなたがたはそのことを認めない限り、絶対に本当の幸福に至ることはできない。そのように語ります。

そうしますと、サムエル記のこの箇所、すべては偶然なのだという説明は全く誤りであると言うことになります。キシュの雌ロバがいなくなってしまった。偶然ではない。サウルの付き人であったひとりの若者が、サムエルのことをも出して、その人に尋ねてみたらどうだろうと提案したこと、偶然ではない。四分の一シェケル銀貨が若者の手にあったこと、そこにも深いご計画がある。水を汲みに出てきた娘たちに出会ったこと。そして町にさしかかったとき、サムエルがこちらの方に向かって出て来たところに出くわす。決して偶然ではない。

神がすべてを御支配されて、すべてをまるでジグソーパズルのパズルをつなぎ合わせていくかのようにして、一つのご計画を成し遂げておられる。一つ一つのピースを見ても、何のことやら全くわからない。けれども、やがて後になってから、全体が鮮やかに見えてくる。そんな世界に私たちは生きているので

す。

（2）もし自分のいのちに意味があるのなら

このことを逆の方向から考えてみましょう。信仰のない方でも、自分の人生にどんな意味があるのかと探し続けています。自分のいのちに意味がないのは耐えられないと感じています。意味がありませんよと言われたら、生きる意欲がなくなります。でも、あなたのいのちにも意味があるというのなら、どういう結論になりますか。すべての出来事は偶然ではないと言うことになります。すべての出来事に意味がある。すべてに意味があるというのなら、この世界が最初に造られたとき、最初から意味が与えられている。誰かが意味を与えなければなりません。ある方がこの世界に意味を与えてくださったので、そこで初めて私たちのいのちにも意味があることになる。聖書は、その方こそ天と地を造られた神なのだと言います。

だから、私たちのいのちは、水の泡のようにはかないものなのでは決してない。むしろ神の目には、宝のような大切ないのちなのだ。それが聖書が語る一貫したメッセージです。

6　イエス・キリストが示される道

若者は言いました。「この町には神の人がいます。この人は敬われている人です。この人の言うことはみな、必ず実現します。今そこへまいりましょう。たぶん、私たちの行くべき道を教えてくれるでしょう。」

このことば、そのまま言い換えることができます。「私たちにはイエスキリストという神のひとり子が与えられています。この方が語る御言葉は、すべて必ず実現します。私たちは今そこへまいりましょう。この方は、必ず私たちの行くべき道を教えてくれるでしょう。」

主イエス・キリストは言われます。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることができません。」（ヨハネ14：6）

サウルと若者はサムエルに伺うために銀貨を差し出しそうとしました。でも、私たちはお金を差し出す必要はありません。その代わりもっと別のものを差し出すのです。

「私のいのちを与えてくださった主よ。助けてください。私はわからなくなりました。私はあなたから離れてしまったために、自分の行くべき道を失ってしまいました。あなたに背いた結果、このような苦しみ味わう者となりました。どうかこんな私をあわれんでください。行くべき道を教えてください。」

そのような心一つで、主の十字架の元に向かっていただきたい。主は、私たちの生きるべき道を教えてくださいます。私たちにわからなくなってしまった、自分のいのちの意味、人生の価値。主は、そのことをもう一度教えてくださいます。どのようにして教えるのでしょう。ことばを語るだけですか。いいえ、この方は私たちのいのちがどれほど高価なものであるのかを身をもって教えてくださいました。主は私たちのために、十字架で進んでご自分のいのちをお捨てになったのです。それで初めて私たちは与えられているいのちがどれほどに高価なものであるのかわかりました。

注がれている恵みを覚えたいと願います。